

地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

法 垣 遺 跡

中津市文化財調査報告 第64集



2013
中津市教育委員会

法垣遺跡
地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

中津市文化財調査報告
第64集

2013
中津市教育委員会

例 言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が2010年度から2012年度に実施した、地域振興施設建設に伴う法垣遺跡(旧遺跡名:大坪遺跡)発掘調査概要報告である。
2. 確認調査は浦井直幸が、本調査は浦井と荻が担当した。
3. 図面等記録類、出土遺物は中津市歴史民俗資料館にて保管している。
4. 調査中、現地にて下記の方々をはじめ多数の方々には有益な御助言、御指導を賜った。(肩書は当時)
田中良之・宮本一夫・舟橋京子(九州大学) 後藤晃一(大分県教育庁文化課) 田中裕介(別府大学教授) 小畑弘己(熊本大学) 村上久和
(順不同、敬称略)
5. 本書の執筆、編集は浦井が行った。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 これまでの調査	4
第3章 調査の方法と成果	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の成果	6
第3節 まとめ	15
報告書抄録	16

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成22年度、中津市農政水産課より、中津市大字加来810-1他にて農産物販売所、休憩施設、トイレ施設、駐車場、多目的広場を備えた地域振興施設の建築・造成が計画された。用地1.8haは大部分が地下げされる計画であり、すべての範囲は大坪遺跡として周知されていた。確認調査は土地所有者から発掘調査承諾を得た後に行った。その結果、多くの地点で遺構・遺物を検出するに至り、平成23年2月15日付で県文化課へ文化財保護法第93条を違反した。平成23年3月1日、県文化課より発掘調査を行うよう通知を受けたため、平成23年5月9日から本調査に着手し、翌平成24年11月末まで調査を実施した。

途中、第5調査区にて縄文時代後期の大型住居から人骨が出土し、また西日本では希少な該期の掘立柱建物も複数棟検出されるに及んで、保存に向けた協議を担当局との間で行った。最終的には市長の判断により、当該区域の設計変更が指示され、重要遺構検出区域全体を盛土保存し、遺跡公園として整備することが決まった。平成25年1月15日、第1回大坪遺跡保存・整備指導者会が開催され、復元対象の遺構を縄文時代のものに絞るなど復元の大枠が決定された。会議後、重要遺構は川砂で埋戻し仮保護した。平成25年度以降は検出面から50cm盛土し、公園整備に着手する予定である。

保存・整備指導者会では遺跡名の変更が議題にあがった。「大坪遺跡」は昭和60年頃、バイパス建設に伴う発掘調査の際に小字を用いて付けられた名称であったが、実際の大坪の小字は調査対象地から南に離れた地点にある。このため、発掘調査地点にあり、かつ遺構が保存された地点の小字である法垣を用いた「法垣遺跡」へ名称を変更することも決められた。平成25年1月29日に県文化課へその旨報告を行った。

第2節 発掘作業の経過

確認調査は、平成22年12月15日～17日、平成23年1月24日に行った。遺構を検出した面積は約1haにのぼったため、対象地を5区に分けて本調査にあたった。

当初は、調査区内最高所の標高27mの地点（第5調査区2,500㎡）から着手する予定であったが、作付されていた野菜の収穫時期と合わずこの部分は最後へ回した。平成23年5月9日から市道・国道沿いの調査を進め、途中、工法変更の動きがあった12月中旬～平成24年2月中旬の間は作業を中断した。平成24年9月中旬には、第5調査区の縄文時代の竅穴住居跡から人骨が出土し、九州大学の田中良之先生・舟橋京子先生に実測及び取り上げをお願いした。第5調査区は保存措置決定後、切土部分は遺構の掘り下げ・圃化作業を行い、保存対象部分は一部の重要遺構の半截などを行うに留めた。本調査は平成24年11月22日まで行った。

遺構実測は、(株)九州文化財総合研究所（平成23年度）、(株)アーキジオ大分（平成24年度）へ委託した。

現地説明会は、第2・第3調査区を対象として平成24年6月16日に行い50名の参加を得た。平成24年9月23日は第5調査区の現地説明会を開催し、市内外から120名の参加者があった。

平成23・24年度の体制は下記のとおり。

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	北山 一彦 (中津市教育委員会教育長～23年度)		
	廣畑 功 (同)	24年度～)	
調査事務	藤原 義郎 (同)	文化振興課長)	
	田中布由彦 (同)	文化財係長)	
	平田 由美 (同)	文化財係員)	
担 当	浦井 直幸 (同)	文化財係員)	
	荻 幸二 (同)	嘱託)	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万6千人、面積491km²を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。八面山に源を発する犬丸川は、三光上秣地域などを北進し、森山付近で東へ鋭角に向きを変え、今津付近を河口とする。上中流域では八面山から八つ手状に伸びる低丘陵に沿うように流れ、下流域では低地の水田や工業地帯を縫うように流れる。

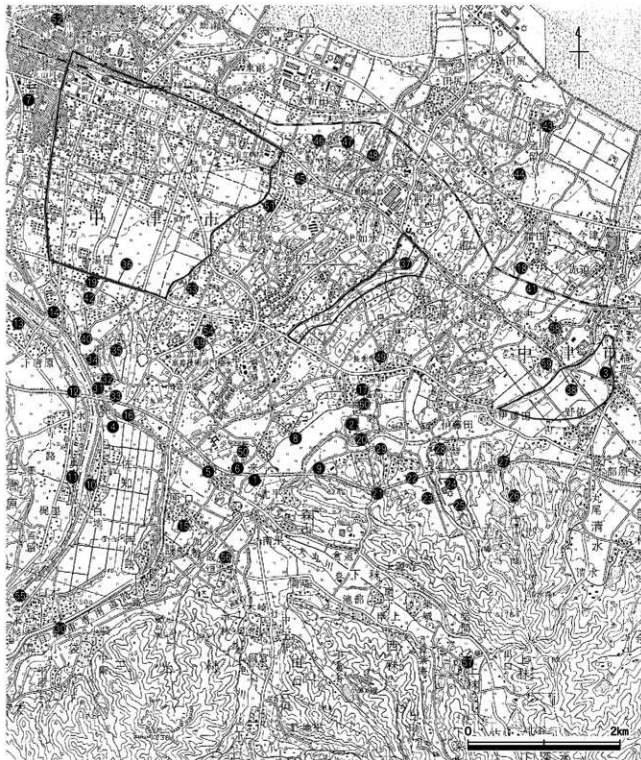
法垣遺跡は犬丸川が東に鋭角に屈折する左岸に位置する。調査区の最高所は標高27mで、東側は崖状を呈し、低地との比高差5mを測る。北・西・南側は緩やかに下り、調査区は浮島野の地形を形成する。遺跡から1.5km北東に所在するボウガキ遺跡では貝塚(入垣貝塚)が所在している。当時は、現在の海岸線から内陸深くまで海水が浸入していたことがわかる。

第2節 歴史的環境

ここでは、今回の調査で検出した遺構に関連する時代を中心に周辺の遺跡を概観する。旧石器時代の石器は才木遺跡(23)や法垣遺跡(1)で発見されている。縄文時代早期は上畑成遺跡で無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡(6)で陥し穴が発見されている。また、山国川中流域の粉洞穴では早期から後期の多数の埋葬人骨や遺物が出土している。遺跡数は縄文後期から増大する。貝塚は犬丸川流域の植野貝塚(3)やボウガキ遺跡(2)横の



第1図 位置図



- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|--------------|-----------|
| 1. 法垣遺跡 | 13. 川下遺跡 | 25. 大谷窟跡 | 37. 大悟法地区条里跡 | 49. 田丸城跡 |
| 2. 求ウガキ遺跡 | 14. 上万田遺跡 | 26. 赤ヤ池窟跡 | 38. 野依地区条里跡 | 50. 大畑城跡 |
| 3. 植野貝塚 | 15. 湊山遺跡 | 27. 踵ヶ追窟跡 | 39. 長者屋敷官衙遺跡 | 51. 池水城跡 |
| 4. 佐知久保畑遺跡 | 16. 上ノ原平原遺跡 | 28. 城山横穴墓群 | 40. 三口遺跡 | 52. 中津城跡 |
| 5. 榎遺跡 | 17. 福島遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 諸田南遺跡 | 53. 末広城跡 |
| 6. 黒水遺跡 | 18. 諸田遺跡 | 30. 臼木古墳群 | 42. 相原廃寺 | 54. 八並城跡 |
| 7. 高畑遺跡 | 19. 市場遺跡 | 31. 上ノ原横穴墓群 | 43. 定留鬼塚遺跡 | 55. 土田城跡 |
| 8. 加来束遺跡 | 20. 犬丸川流域遺跡 | 32. 幣旗邸古墳群 | 44. 定留遺跡 | 56. 田嶋崎城跡 |
| 9. 森山遺跡 | 21. 洞ノ上窟跡 | 33. 助助野地遺跡 | 45. 亀山古墳 | 57. 上林城跡 |
| 10. 佐知遺跡 | 22. 安平遺跡 | 34. 坂手壘城跡 | 46. 合馬遺跡 | 58. 犬丸城跡 |
| 11. 上唐原了清遺跡 | 23. 才木遺跡 | 35. 相原山首遺跡 | 47. ガラヌノ遺跡 | 59. 中尾城跡 |
| 12. 上唐原遺跡 | 24. 城山窟跡群 | 36. 神代地区条里跡 | 48. 全徳遺跡 | 60. 山中城跡 |

第2図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

入垣貝塚が良好に遺存する。高畑遺跡(7)では女体を模した土偶が出土した。住居跡や該期の遺物は、ボウガキ遺跡、櫃遺跡(5)、佐知遺跡(10)、佐知久保畑遺跡(4)、上唐原了清遺跡(11)、上唐原遺跡(12)などの台地や自然堤防状で確認されている。ボウガキ遺跡は住居内に4体の人骨が墓壙を設けて安置されており、九州で初めての住居内埋葬として注目された。晩期の遺物は、加来東遺跡(8)の自然流路状の遺構から一定量出土し、漆が塗膜された精製浅鉢土器が2点出土している。

弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡(16)で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土墳墓・住居跡・溝が福島遺跡(17)で確認され、前期末から後期初頭の集落全城が森山遺跡(9)で検出された。近年の東九州道建設に伴う調査では、諫山遺跡(15)で前期の貯蔵穴、中期の住居跡・小児棺、後期の住居跡などが確認された。同遺跡からは市内で初めて仿製内向花文鏡が出土している。成人用甕棺は上万田遺跡(14)で出土した。該期の遺跡は低地を望む台地上で発見されることが多い。

古墳時代の遺跡としては亀山古墳(45)が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。5世紀中ごろには山国川に面する助野地遺跡(33)で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓群(31)が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群(29)、城山古墳群、城山横穴墓群(28)などがある。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡(35)で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡(18)、定留遺跡(44)、市場遺跡(19)で発見されている。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、踊ヶ迫窯跡(27)、草場窯跡、洞ノ上窯跡(21)などがある。

古代には寺院遺跡として、7世紀末に白鳳系の相原廃寺(42)が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には神代平野に条里制(36)が施行されたと考えられ、条里の南限には「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀後半にはその官道に沿う地に下毛郡正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡(39)が確認された。また、諸田南遺跡(41)で掘立柱建物群や円面碗が検出されている。9世紀前後の時期は、諫山遺跡で越州窯系青磁碗、緑釉陶器などが検出され、三口遺跡(40)では、8世紀後半～10世紀中ごろの集落跡が見つまっている。

中世は、長久寺の田丸城跡(49)など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城(52)が築城される。黒田氏は、池永城(51)、犬丸城(58)、大畑城(50)、長岩城など多数の地元豪族の居城を攻め落し支配の足を固めた。中津城は近年の調査によって、石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明している。

近世は関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632(寛永9)年に完成を見る。1717(享保2)年、奥平氏が入部し、1871(明治4)年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。

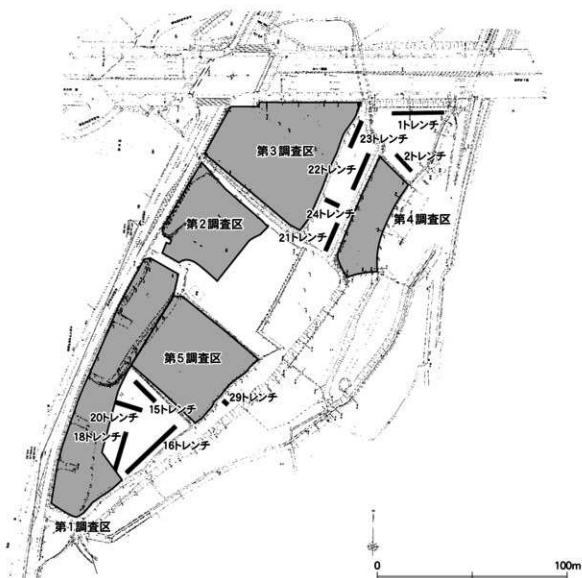
第3節 これまでの調査

法垣遺跡は、昭和60年度の国道バイパス建設時に今回調査区の北側で発掘調査が行われた。古墳時代後期の竪穴住居10棟、中世の掘立柱建物5棟などが調査されている。平成8年度、工事対象地中央付近の事務所建設に伴う発掘調査を中津市教育委員会が行っている。調査面積は4,067㎡で、縄文・弥生時代の土坑4基、古墳時代の竪穴住居3棟、古代の掘立柱建物2棟が検出された。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

確認調査は、平成8年度調査地点と発掘調査の承諾が得られていない範囲を除く地点に1～30トレンチの30本設定し実施した。微高地と犬丸川までの低地に位置する1・2トレンチは、若干の遺物が出土したものの遺構は検出できなかった。微高地南側の15・16・18・20トレンチは、表土を30cm下げると茶褐色の地山に至り、ある時期地下げされた状態を呈した。21～24・29トレンチでは遺構を検出したものの盛土施工の範囲のため本調査の対象から除外した。遺構を検出した切土施工範囲を1～5区に分けて本調査を実施することにした。



第3図 法垣遺跡調査区配置図 (S=1/2,000) トーン部分が本調査区域

第2節 調査の成果

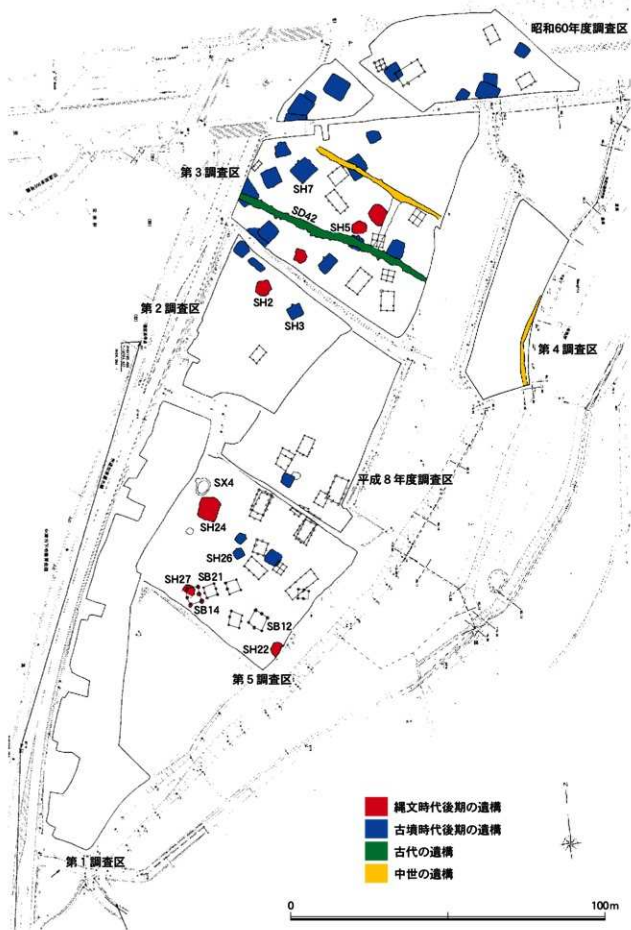
本調査は平成23年5月に開始し、途中2ヶ月間の作業休止期間を挟んで平成24年11月下旬まで実施した。調査面積は約1万㎡で、縄文時代後期の竪穴住居跡7棟、掘立柱建物6棟、古墳時代後期の竪穴住居跡18棟、古代の大規模溝状遺構、中世の溝状遺構を検出した。現在整理作業の途中であるため遺構数については今後増減する可能性がある。このうち鐘崎式土器が出土する縄文時代後期の竪穴住居跡1棟は、埋土に多量の土器を含む黒褐色土が堆積していた。掘り下げ途中住居西側にて人骨が出土している。また、遺骸から1.4m南の黒褐色土中から滑石製の块状耳飾りの破片も1点出土した。住居中央南よりでは胴部下半が打ち欠かれた深鉢が正位の状態出土している。

縄文時代後期の掘立柱建物群は人骨出土住居から南東に20～30mの地点で検出した。検出した建物群は計6棟で、1間×2間の構造を基本とする。このうち1棟の柱穴は直径1m以上を測る大型で、全ての柱穴において柱痕跡を確認した。遺構の時期は、掘方埋土、出土遺物の状況、後出する遺構との切り合い関係などから縄文時代後期中葉の掘立柱建物群と推測している。掘立柱建物の用途については現時点では不明である。

以下、第1調査区から第5調査区の順に主要遺構の説明を行う。



第5調査区調査風景（北から）



第4図 法垣遺跡主要遺構配置図 (S=1/1,200)

第1調査区

土坑、約1,000基のビットを検出したが住居跡は確認できていない。

第2調査区

縄文時代後期の竪穴住居跡1棟、古墳時代後期の竪穴住居跡2棟・土坑、古墳もしくは古代の掘立柱建物1棟などを検出した。

2号住居跡 (SH2)

南北約4.9m×東西5.1mの不等辺の5角形状を呈する。南壁は近現代の攪乱により一部破壊されている。床面中央に楕円形の炉跡をもち、南東0.3mに安山岩の立石が認められた。立石は炉に対して正対する。

遺物は縄文時代後期の土器（北久根山式段階）が出土している。



SH2 完掘状況（西から）

3号住居跡 (SH3)

長辺4.6m×短辺3.9mの長方形を呈する。支柱穴は4本で、北側の長辺部分にカマドを有する。カマドは60cm程北側へ張り出し、床面付近で焼土や被熱硬化面を検出した。袖石などのカマド部材は存在しなかった。上層の白色土はカマド全体を覆うような状態であった。

須恵器など古墳時代後期の遺物が出土している。



SH3 生活面（南から）

第3調査区

縄文時代後期の竪穴住居跡3棟、古墳時代後期の竪穴住居跡10棟、古墳もしくは古代の掘立柱建物8棟、平安時代の溝状遺構1条、中世の溝状遺構1条などを検出した。

5号住居跡

直径4.2mの楕円形プランを呈する。支柱穴は周壁縁辺に配されている。床面中央は楕円形状の炉跡があり、被熱した川原石を2つ検出した。他は住居廃絶時に抜き取られたものと考えられる。

遺物は縄文時代後期（北久根山式段階）の土器が出土している。



SH5 完掘状況（南から）

7号住居跡

長辺6.6m×5.9mを測る。方形プランを呈し、主柱穴は4本である。カマドは西辺に造られ、外側へ張り出さない。カマドの支脚として小型の短頸壺が天地を逆さにして据えられていた。周辺には遺物が散乱していたことから、住居廃絶時にカマド祭祀が行われたものと推察する。また、張り床除去後に東端部で焼土を検出している。



SH7 (東から)

42号溝状遺構

長さ約60m、最大幅2.9m、検出面からの深さ1.8mを測る。やや蛇行し、第3調査区を南北に分断する。古墳時代後期の住居跡など少なくとも3棟と重複している。断面はV字状で、上位は花卉状にやや開く。遺物は多量で埋土中位から上位にかけて集中して出土する。遺構がある程度埋まった段階で遺物の遺棄が始まったのであろう。遺物分布は遺構中央から東端にかけて濃い。11世紀中頃の土師器皿・壺・脚付羽釜・瓦器壺などが出土している。他に陶器甕、埴鍋、滑石製石鍋、鉄刀なども出土している。出土状況から遺物の多くは、溝の両側から投げ込まれたものと推測され、土師器皿・壺などに完形の遺物の出土が目立つ。東端部では遺物に混じって人頭大の円礫が出土し、礫の一部は被熱し赤褐色を呈するものもあった。



SD42b区 (西から)

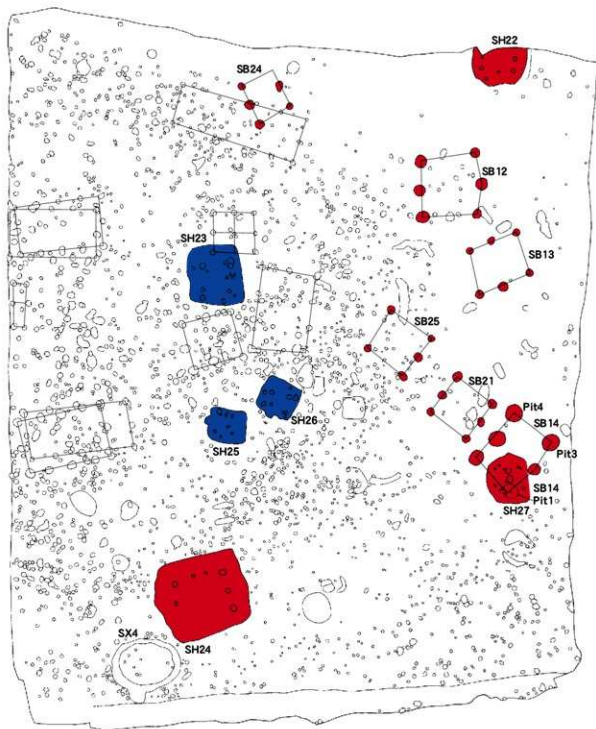
第4調査区で遺構の延長部分を精査したが見つからないことから、遺構はその手前で終息するか、南北どちらからに屈曲するものと考えられる。遺跡の性格は、現時点で詳らかにできないが、遺構の形状から用水路的な用途を想定する。

第4調査区

この地点は第3調査区より3m程低い地点にある。縄文時代後期の風倒木痕、複数の柱穴状遺構、中世の溝状遺構1条などを検出した。表土剥ぎの際、拳大の姫島産石核が出土している。



SD42 遺物集中部分



- 縄文時代後期の遺構
- 古墳時代後期の遺構

0 20m

第5図 第5調査区遺構配置図 (S=1/300)

第5調査区

標高26～27mを測り本調査地点の最高所にあたる。調査以前は高菜畑で表土を30～70cm程度除去すると遺構検出面に至る。表土は調査区東・南側が薄く、北・西側にかけて厚い。特に東・南側は黄褐色の地山で、中央部や北・西側で認められた茶褐色の地山とは様相を異にする。第3調査区42号溝状遺構壁面を見ると、茶褐色土層下位に黄褐色の地山が存在するため、茶褐色土を除去する地下げがある時期に行われたことがわかる。おそらく高い地形の東・南側部分を削平し、元々低い地形の北・西側にレベルを合わせたものと推察する。

縄文時代後期の竪穴住居跡3棟、掘立柱建物6棟、古墳時代の竪穴住居跡3棟、多数の柱穴状遺構、複数の掘立柱建物跡、環状遺構などを検出した。表土剥ぎの際、緑釉陶器碗が1点出土している。

24号住居跡

一辺6.3m、深さ30～40cmを測り、隅丸方形を呈する。途中保存が決定したため完掘しておらず、主柱穴の数は不明である。周壁に対して並行する配置で、東列のみ4基認められる。遺構検出時は住居プランが明確でなく、黒褐色の埋土を有する楕円形の土坑と認識していた。よって、土層観察ベルトは住居に合わせたものではない。

住居西北部から人骨が1体出土した。住居がある程度埋没した段階に墓壇を構築し安置されたものと考えられる。墓壇底は住居床面まで達しない。埋葬姿勢は左側臥屈葬で頭位は東、顔は南か南東に向ける。上肢は胸上へ上げ、膝を南に傾け、きつい屈葬姿勢をとる。九州大学大学院の調査所見では頭蓋骨が本来あるべき所から北側にずれて位置する点が指摘されている。遺骸から1.4m南の黒褐色土中から滑石製の珧状耳飾りの破片が1点出土している。住居は廃絶後一時緩やかな窪地地形を呈していた様子で、そこに多量の鐘崎式土器や石器を含む黒褐色土が堆積していた。また、黒褐色土の掘り下げ中、



SH24 全景（東から）



人骨出土状況（西から）



SH24 SW区出土物

胴部下半が打ち欠かかれた深鉢が正位の状態出土している。

床面中央に楕円形の石囲炉をもつ。壁に貼り付けるように被熱した川原石が3つ検出され、下部は同形状の川原石を敷き並べている。壁に沿う石は数個抜き取られており、住居床面上で被熱した石を数点確認している。炉の内部は焼土が全く検出できず、炉の北西に抜き出されたような形で広がっていた。

住居の形態は、福岡県築上郡築上町山崎遺跡7号住居跡に類似する。



SH24 炉完掘（半截）（南から）

22号住居跡

遺構の3分の1を後世に削られている。長径5.3m、深さ20cmを測る。主柱穴は5基検出しており、周壁に沿うように並ぶ。床面中央部に石囲炉を配し、壁に沿うように扁平な川原石を6つ並べる。表面は赤変し、はつり痕も認められた。上部は花卉状に開く形状で、内部に焼土が詰まっていた。

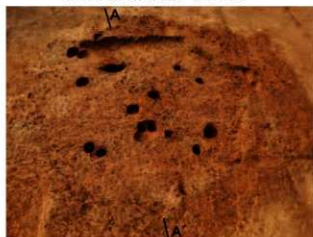
遺物は、24号住居のものよりやや時代の下る鐘崎式土器が出土した。



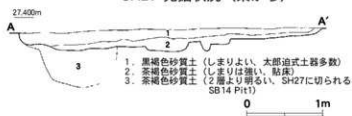
SH22 生活面完掘（西から）

27号住居跡

遺構南壁は確認調査トレンチにより壊されている。長径4.0mを測り、主柱穴はいずれも小ぶりである。床面中央部に地床炉があり、楕円形の掘り込みを有する。埋土にわずかに炭粒などが認められるが、焼土は存在しない。遺物は、太郎迫式期の土器が出土している。また、住居西側で後述する14号掘立柱建物の柱穴を切る。本住居跡が14号掘立柱建物の後に構築されていることがわかる。



SH27 完掘状況（東から）



第6図 27号住居跡東西ベルト (S=1/50)

14号掘立柱建物跡

24号竪穴住居から南東に20～30mの地点で縄文時代の掘立柱建物群を検出した。検出した建物は計6棟で、1間×2間の構造を基本とする。

14号掘立柱建物跡は、掘方の直径約0.9～1.4mを測る大型の遺構で、検出面からの深さは平均56.5cmを測る。全ての柱穴において柱痕跡を確認している。建物規模は、芯々距離で南北4.4m、東西3.9mを測り西列中央の柱穴は西側へ張り出し、胴膨れの形状を呈する。柱痕跡の直径は平均39cm、深さ平均48cmを測る。

柱痕跡埋土は黒褐色砂質土で、1～2mm大の炭粒、焼土粒が多量に混入し、一部土器や骨粉が含まれるものも存在した。14号掘立柱建物Pit3は柱痕跡に人頭大の円礫を据え置いている。掘方埋土は数層に分層でき、しまりは非常に強く暗茶褐色や暗黄褐色の砂質土を基調とする。黄褐色ブロックも斑に混入していた。掘方底面から柱穴下位の壁沿いは、1～5mm大の炭粒・焼土粒、土器片を含むしまりの非常に強い黒褐色砂質土が堆積していた。この層は14号掘立柱建物の柱穴全てにおいて検出している。Pit4はこの層から鐘崎式土器を含む一定量の遺物を検出した。

遺構の時期は、掘方埋土から鐘崎式土器を含む遺物が中量検出され他時期の遺物は全く含まれていない点、古墳時代後期の遺構と埋土や建物構造が異なる点、太郎迫式土器の出土する27号住居に切られる点などから縄文時代後期中葉の掘立柱建物群と判断した。また、他の同形態の掘立柱建物についても該期の建物跡と推定している。掘立柱建物は上屋構造を有していたか、もしくは柱だけを建てた立柱遺構であったのか現時点では判断できていない。また、隣接する21号掘立柱建物は、14号掘立柱建物と近接するため、上屋構造を持っていた場合は、同時期に機能した建物ではない可能性もある。



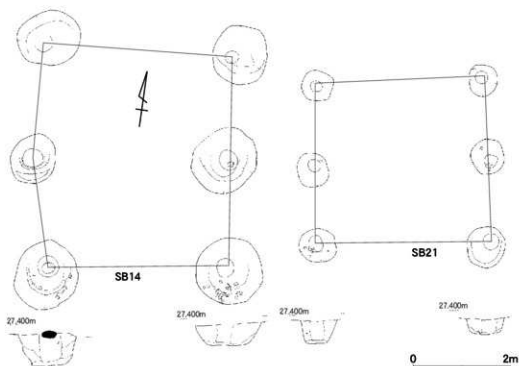
SB14 (北から)



SB14 Pit3 (南から)



SB14 Pit4 (南西から)



第7図 SB14・21平面図・断面図 (S=1/80)

12号掘立柱建物跡

1間×2間の構造で、長軸4.7m×短軸4.2m、掘方は円形もしくは楕円形状を呈する。5基の柱穴から柱痕跡を確認している。掘方直径は平均95cm、深さ平均35cmを測る。柱痕跡の直径は平均36.5cm、深さは平均22cmを測る。14号掘立柱建物と同じ形態をとるため、縄文時代後期の遺構と考えられる。この地点は後世の地下げの影響を最も受けた所で、往時は14号掘立柱建物と同等の規模を有していた可能性がある。



SB12 半截状況 (西から)

26号竪穴住居跡

南北2.6m×東西2.8m、深さ10cmを測る。古墳時代後期の遺構で、北側周壁から張り出すようにカマドが構築されている。楕円形の焼土面、袖石の抜き取り痕を検出した。第3調査区で検出した該期の竪穴住居と比較するとかなり小型である。明確な主柱穴は確認できておらず、竪穴外に主柱を据える構造であった可能性もある。



SH26 完掘状況 (東から)

性格不明遺構 4

幅60cm、深さ10cmの溝を楕円形に巡らせた遺構で長軸5.4m×短軸3.9mを測る。西側は長さ1m×幅1.2mの張り出しを有する。周辺地形と合わせて後世にかなりの削平を受けている。遺構中央部は複数の柱穴が認められたが、配置状況から当遺構との関連は薄い。溝からは、拳大やそれ以下の川原石などが多量に検出され、10数個の磨り石や赤変した石などが検出された。他に中世末の播鉢や鍋が少量出土し、埋土が縄文時代の遺構とは異なっている。遺構の時期・性格は現時点では保留とし、先学諸兄のご教示を賜りたい。



SX4 検出状況（西から）

第3節 まとめ

当遺跡の発掘調査では縄文時代後期、古墳時代後期、古代、中世、近世の遺構を検出した。特筆されるものは第5調査区の成果であり、縄文時代後期の竪穴住居から人骨及び多量の遺物が出土した。九州では貝塚での埋葬人骨の出土例はあるが、竪穴住居から発見されたのは、中津市のボウガキ遺跡に次いで2例目である。縄文時代後期中葉の墓制を考える資料となりうる。また、当該期の掘立柱建物を検出したが、九州ではこの時期の掘立柱建物の報告例は、いくつか発掘調査後に指摘されている例があるが、確実な報告例はない。当遺跡の掘立柱建物群は発掘調査中に現場で確認できたものであり、いまだし検証を要するが、九州における当該期の集落構造の解明に繋がる可能性のある重要な遺構である。

遺構の配置を見てみると竪穴住居や掘立柱建物は調査区の縁辺部に位置している。中央部は土壌など当該期の遺構は見つかっていないため、広場として利用されていたことも考えられる。調査区全体を鳥瞰すると、竪穴住居は第2・3調査区周辺と第5調査区周辺にまとまって検出されている。現在遺物整理中であるが、すべて同時期の所産にならない状況にあり、一時期に1棟もしくは2～3棟程度の竪穴住居が存在していた様子である。これに掘立柱建物が付随することになるが、どの時期に伴う遺構になるのか今後検討していきたい。

周辺の様子を見ると当遺跡から北東1.5kmの地点にボウガキ遺跡・入垣貝塚が存在し、当遺跡と同じ犬丸川を望む位置にある。また、河口部には植野貝塚が存在している。犬丸川を望む高台に当該期の集落や貝塚が展開していることは当時の集落景観を考える上で参考となろう。

第5調査区のほとんどは保存されることが決定した。保存に至るまでには諸先生方を始め多くの方からご指導いただいた。また農政部局は、文化財保護に理解を示し工法変更など多大な労力を割いていただいた。遺跡の保存はこの方々の協力なしには成しえなかった。遺跡公園として整備・活用し、市民に資することを肝に銘じてまとめとする。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほう がい い せき							
書 名	法 垣 遺 跡							
副 書 名	地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻 次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第64集							
編 集 者 名	浦井 直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	2013年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大坪遺跡	大分県中津市 大字加来 810-1他	44203	203072	33' 32" 52"	131' 12" 55"	20110509 ～ 20121122	10,000㎡	地域振興 施設建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
大坪遺跡	集落	縄文・古墳・ 古代・中世	竪穴住居跡・ 掘立柱建物跡・ 溝状遺構	縄文土器・須恵器・ 土師器・瓦質土器		縄文時代後期の竪穴住居跡、 掘立柱建物を検出した。		
要約	縄文時代後期の複数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。竪穴住居跡の内1棟から人骨が出土している。当該期の集落を研究する貴重な資料を得た。第5調査区は埋土保存し、整備・活用を図ることになった。							

法 垣 遺 跡

地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

中津市文化財調査報告 第64集

2013年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 藤川原田印刷社